

# 指導資料

## 外国語(英語)第78号

 鹿児島県総合教育センター

—中学校、特別支援学校対象—  
平成27年4月発行

### 鹿児島学習定着度調査を生かした中学校外国語科の授業改善

鹿児島学習定着度調査は、「基礎・基本」及び「思考・表現」に関する問題で構成されている。県教育委員会による平成25年度の調査結果報告書では、「基礎・基本」については、おおむね定着が図られているものの、「正しい語順や語法を用いて文を構成し、文と文のつながりなどを注意して『書くこと』に課題がある」こと、「考えや気持ちを表現するために、内容的にまとまりのある英文を作成する言語活動の充実を図る必要がある」ことが指摘されている。

そこで、本稿では、この指摘を踏まえ、まず、平成25年度調査結果を問題別に振り返り、指導上の課題を明らかにする。次に、授業で改善を図りたいポイントを示すとともに、当教育センターが提唱する「判断基準」を活用した授業改善について述べる。

#### 1 平成25年度調査結果から見える指導上の課題

##### (1) 主として「基礎・基本」に関する問題

(第1学年)

4 (2) 【対話文の概要把握(聞くこと)】

(対話) Mark : Do you study Japanese, Nancy?  
Nancy : Yes. But I don't study it every day.  
How about you, Mark?  
Mark : I study it every day.  
Nancy : Oh, that's good.

(問題) Does Nancy study Japanese every day?  
ア Yes, she is.      イ Yes, she does.  
ウ No, she is not.      エ No, she doesn't.

【通過率54.0%】

9 (2) 【対話の流れに合う英文の語順】

A: It that your bike?  
B: Yes. But ( it is not new ) .

【通過率43.9%】

(第2学年)

9 (3) 【対話の流れに合う英文の語順】

A: ( What sport do you ) like?  
B: I like tennis.

【通過率55.3%】

10 (1) 【動詞の語形変化】

I study it hard.を過去形の文にする。

【通過率54.6%】

否定文やWh-疑問文に関する設問の通過率が60%未満であり、英文における語と語のつながりについての知識の定着が不十分である。クラスルーム・イングリッシュを通して基本的な表現を生徒に繰り返し聞かせたり言わせたりする時間を設定するなど、定着のための機会を意図的に取り入れることが大切である。

また、動詞の語形変化も十分には身に付いていないと判断される。音声による指導の充実に加え、文字にしていく過程で定着を図る指導を継続的に行う必要がある。

##### (2) 主として「思考・表現」に関する問題

(第1学年)

7 (2) 【対話文中の指示語の理解(読むこと)】

Satomi: Oh, you have a nice cap.  
Ken : Thank you. I like it very much.  
ア time イ a nice cap ウ color エ blue

【通過率52.5%】

|        |   |
|--------|---|
| (第2学年) |   |
| 8      | (3) 【英文の概要把握 (読むこと)】<br>本文の内容に合う最も適当な英文を選ぶ問題<br>(本文, 設問は省略) 【通過率56.9%】  |
| 10     | (2) 【質問に対する適切な表現 (書くこと)】<br>Tom : .... Why do you study it?<br>(it=English)<br>Masato: Because (I want to work in America).<br>【通過率 伝達57.0%, 正確48.2%】 |
| 11     | 【テーマに沿った表現 (書くこと)】<br>「好きな季節」について3文以上で書く問題<br>【通過率1文目(伝達)83.8%(正確)80.6%】<br>【通過率2文目(伝達)61.2%(正確)51.4%】<br>【通過率3文目(伝達)44.4%(正確)33.1%】                  |

まとまりのある英文を読んで概要や要点を理解することや、テーマに沿って複数の英文を書くことに課題が見られる。「思考・表現」の設問に用いられる文章を構成しているのは、基本的な語彙や表現である。また、「書くこと」の設問においても基本的な語彙や表現を用いることができる。したがって、「思考・表現」に関する力を高めるためにも、習得した基礎的・基本的な知識・技能の活用を図る指導を一層充実させていく必要がある。

## 2 平成26年度調査問題を踏まえて充実を図りたい指導

### (1) 「読むこと」の指導

いずれの学年においても、代名詞の内容を答えさせたり、文脈に合う接続詞を選択させたりした上で、本文全体の概要を正確に把握できているかをみる問題が、継続して出題されている。まとまりのある英文を正確に理解するためには、大切な部分を捉えた上で、文と文の相互の関連に注意しながら読む力が必要である。したがって、授業では、文と文のつながりに関わる語(接続詞, 副詞, 代名詞)に着目させたり、Canadaをyour countryと置き換えたりするなどの言い換えの表現に注意させたりするような指導を継続的に行うことが大切

である。

また、表1に示すように、第2学年では、問題文の語数が増えている。指導に当たっては、読み終わるまでの時間を目安として示すなどして、生徒の実態に応じて可能な限り速く読ませる指導が求められる。加えて、Now / I study / Japanese and English / every day / because I want / to be a Japanese teacher / in Canada.のように、まとまりのある語句ごとに意味を捉え、英語の語順のまま読み進めながら、全体の内容を把握することに慣れさせる必要がある。このような指導は、「聞くこと」の理解力の向上にもつながるため、継続的に取り組ませたい。

表1 第2学年「読むこと」の問題文の語数

| 問題 |     | 平成25年度 | 平成26年度 |
|----|-----|--------|--------|
| 5  | (1) | 73語    | 125語   |
|    | (2) | 71語    | 158語   |
| 8  |     | 136語   | 190語   |

### (2) 「書くこと」の指導

|        |  |
|--------|--|
| (第1学年) |  |
| 11     | 【テーマに沿った表現 (書くこと)】<br>3文以上の「自己紹介」の英文を、相手の情報に書かれている内容を踏まえて書く。 |
| (第2学年) |  |
| 11     | 【テーマに沿った表現 (書くこと)】<br>メールを読み、その返事として、「自分の学校」について紹介する英文を書く。   |

第1学年の「書くこと」に関する問題では、メッセージを送る相手の出身地や好きなことなどの情報が与えられている。また、第2学年の問題でも、相手の学校のことが紹介されている。いずれも、読み手を意識して書くという、コミュニケーション場面が想定されている。この問題を指導に生かす際は、例えば、第1学年では“I like soccer, too.”、第2学年では“There is a big lake in my city. You can see many birds, too.”などの、相手の情報を受けて英文を書く力を育てる視点も大切にしたい。

### 3 具体的な指導の在り方

#### (1) 4技能の統合的な活用を図る活動を通じた授業改善の必要性

本調査では、実際のコミュニケーション場面における理解力や思考力、表現力が問われており、4技能の総合的な育成を図る指導の一層の充実が求められている。そのためには、英語を聞いた後に質疑応答や意見交換を行ったり、書いた作品を基に発表したりするなど、4技能を統合的に活用する活動を効果的に設定する必要がある。

4技能の統合的な活用を図る活動を行うに当たっては、目指す生徒の姿をあらかじめ明らかにしておくことが大切である。例えば、英文を読んで理解したことについて自分の考えを書く活動を行う場合、生徒が何をどのように書いていけば目標を達成したと判断できるかということを、事前に分析し、整理しておけば、授業中に具体的な指導を行うことができる。整理する項目の中には、「語彙や表現の適切な使用」も含まれることから、計画的な指導により、「思考・表現」の力を高める過程で、「基礎・基本」の習得や活用を図ることも期待できる。

#### (2) 4技能の統合的な活用を図る活動における「判断基準」を設定した指導の実例

ここでは、4技能の統合的な活用を図る活動を行う際に、「基礎・基本」の習得や活用を図りながら、「思考・表現」の力を育成するのに有効な手立てとして、当教育センターが提唱している「判断基準」作成の手順と指導過程の例を示す。活動内容は、第2学年における、「小学校時代からの自分がどのように変化したかが分かる自分史エッセイの作成」である。

#### ア 「判断基準」作成の手順

- 1 題材や生徒の実態等を基に、単元終末の学習活動及び評価規準(表2中①)を設定する。
- 2 評価規準を基に、単元終末に生徒に書かせたい英文に含まれているべき事項を分析し、「判断の要素」として整理する。(同②)
- 3 単元の目標や生徒の発達の段階等を踏まえ、「判断の要素」のそれぞれの項目について、どの程度達成していれば「おおむね満足できる」状況であるといえるかを検討し、判断基準Bを設定する。(同③)
- 4 判断基準Bを基に、「おおむね満足できる」状況を具体的な英文で表した「予想される生徒の表現例」を想定する。(同④)

学習活動を設定するに当たっては、既習単元の学習内容との関連を踏まえることで、既習事項等の活用を図り、表現の幅を広げさせることもできるため、年間指導計画に意図的に位置付けることが望ましい。

表2 「判断基準」の例

|  |         |
|--|---------|
| <b>評価規準(外国語表現の能力)・・・①</b>  |         |
| 過去から現在までの自分の変化について紹介するエッセイを書くことができる。   |         |
| <b>判断の要素・・・②</b>   |         |
| ア 自分のことに関する記述  | イ 英文の構成 |
| ウ 既習事項の活用  | エ 英文の量  |
| <b>判断基準B・・・③</b>   |         |
| ア 次のような内容を書いている。   |         |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 小学校時代にしていた(いなかった)こと</li> <li>・ 現在している(いない)こと</li> </ul>   |         |
| イ 過去から現在まで自分の変化の様子が伝わる文章構成である。   |         |
| ウ 過去や現在の自分の様子を伝えるための既習表現(過去形、現在形、can、接続詞when等)を活用している。   |         |
| エ 6文以上の英文を書いている。   |         |
| <b>【予想される生徒の表現例】・・・④</b>   |         |
| When I was in elementary school, I didn't like reading. I didn't read any books. When my brother was reading books, I was playing video games. |         |
| Now I'm a junior high school student, and I like reading. I'm reading 'Roman Holiday.' It is interesting.                                      |         |

実際の指導場面で、例えば、“I watched a movie. It was 'Roman Holiday.' I liked it very much. I found the story at the library.”のような表現が加わり、「おおむね満足できる」状況を超えたと見なされる英文には、他の作品より高い評価を与えるなど、適切に評価することが大切である。

イ 「判断基準」を活用した授業例 (展開のみ)

全ての生徒を「おおむね満足できる」状況に到達させることを目指し、次のような指導を行う。

| 生徒の活動  | 指導上の留意点  |
|--|--|
| 1 モデル文の概要や要点を理解する。<br>(発問の例)<br>“Was the girl outgoing?”<br>“What did she do?”<br>“What does she often do now?”<br>“What sport does she like?” | ○ 「どのような内容か」、「どのような文章構成で書かれているか」、「どんな語彙や表現が用いられているか」など、「判断基準」として設定した項目に関連する部分に重点を置いて指導する。<br>○ 書く活動において生かすことができる表現に気付かせたり、モデル文の文章構成を確認させたりする。<br>○ 発問やその答えについては、特に「判断基準」に関わりのあるものを中心に板書しておく。 |
| 2 モデル文を音読する。   | ○ 表現活動への橋渡しになるように、正しい発音、リズムや抑揚などを通して文章構成や表現に音声面で十分に慣れ親しませるようにする。   |
| 3 「自分が変化したと思うこと」について話す。  | ○ “When I was in elementary school,” や “Now I am a junior high school student,” は共通して使わせ、それらに続く言葉を使わせるようにする。<br>○ ペアやグループで、つなぎ言葉を用いたり身振り手振りなどの工夫をしたりしながら話すようにさせる。                            |
| 4 「自分が変化したと思うこと」について書く。  | ○ 聞く側には、1の活動で板書した発問の英語を参考に質問させる。<br>○ 実際に自分が話したり、聞いたりした英語を書かせるようにする。<br>○ 「判断基準」に照らし、不足している部分がある場合は、気付きを促すような問い掛けを行う。  |
| 5 書いた英文についてのメモを基に発表する。   | ○ ペアやグループ内で書いた英文を確認させ、互いに助言させる。<br>○ 発表前に十分な練習の時間を確保し、書いた英文をそのまま読ませるのではなく、メモを基に言わせるようにする。  |

1 では、後半の表現活動で、生徒が「判断基準」の項目を全て満たすことができるよう、意図的に発問したり、生徒に気

付きを促したりすることが大切である。

2 では、大切な表現を聞かせたり、言わせたりする時間を十分に確保し、最終的には定着を目指したい。その際、既習単元の表現等を想起させる発問を行えば、基礎的な知識・技能の更なる習得を図ることも期待できる。

3 は、英文を読むのではなく、メモ等に基づき何とかして伝えようとする姿勢を求める活動である。ここでは、正確さよりも流暢さに重点を置いて指導したい。感想や意見の表現は、クラスルーム・イングリッシュとして教師が普段使っているものから使わせるとよい。

4 では、正確に書くことを求める。授業後に英文を回収し、訂正後に清書させる方法も考えられるが、書く活動の前に、教師が生徒の英語を聞き、誤り等について口頭で訂正を行った後に書かせると、生徒は正確に書くことだけに集中することができる。ペアやグループ内で相互にチェックさせることで、自律的な学習態度を育てる視点も大切にしたい。

このように、4技能の統合的な活用を図る活動において「判断基準」を設定することは、あらゆる場面で具体的な指導につながり、「思考・表現」だけでなく、「基礎・基本」の力を高める上で有効に働くことが期待される。各学校においても、この取組を授業改善のために積極的に実践されることが望まれる。

－引用・参考文献－

- 鹿児島県教育委員会「平成25年度鹿児島県学習定着度調査結果報告書」平成26年3月, pp.17-18
- 鹿児島県総合教育センター『研究紀要 No.117』平成25年
- 鹿児島県総合教育センター『研究紀要 No.119』平成27年  
(教科教育研修課)